

## 故田中恭子先生を偲んで

吉川洋子

南山大学総合政策学部

昨年9月ベトナムから帰国した翌日、私の敬愛する田中恭子先生が9月5日に急逝されたという電話を受けた。2日前にフエから葉書を出したばかりで、予想もしなかった悲報であった。1年半にわたるリハビリ生活は、東京へ移られてからも順調に進んでいると聞いていたので、あせらずゆっくりと回復されるよう願っていたからである。

私にとって田中先生は頭脳明晰の秀でた先輩であると同時に友人でもあり、個人的にも多くのことを学ばせていただいた。南山大学総合政策学部へ奉職したのも呼んでいただいたからである。ご逝去から2ヵ月後の11月には、瀬戸キャンパスにて総合政策学部主催の「故田中先生の追悼式ならびに偲ぶ会」を、東京でもアジア研究者ら学界関係者らで「偲ぶ会」をとり行った。当時はまだご逝去の実感が湧かなかつたが、半年を経て研究室も空になり、名前が名簿から消えるなどして、改めて田中先生の人間としての器が、またキャパシティーがいかに大きかったか、が思い起こされ、万感胸に迫るものがある。

なにより研究者としての田中先生の専門領域の広さには目を見張るものがある。先生は国際基督教大学行政学研究科修士課程を修了され、さらにオーストラリア国立大学国際関係学科から中国の農村革命に関する論文で博士号を授与された。、『土地と権力』1996年)その後、シンガポール大学文学部で9年間教えられた後、日本(中部大学)に帰国するや『シンガポールの奇跡』(中公新書1984年)をものにされ、以来、当時ほとんどいなかったシンガポール研究者として先駆的研究を数多く発表されてきた。このように中国研究から出発され、その後、シンガポール研究、マラヤ研究、東南アジア華人研究、さらに中国の対外政策と東南アジア華人、アジア太平洋地域と中国の関係(『現代中国の構造変動 国際関係』2001年)へと、東南アジアと中国の両専門領域を束ねる研究を重ねられた。その集大成が毎日新聞アジア太平洋賞特別賞を受賞された『国家と移民』2002年である。

このような活発な研究活動に加えて、田中先生は長年にわたり大学行政の要職にあってその最前線に身をおかれていた。静岡県立大学から南山大学へ移られ、総合政策学部の新設準備に参加された。学部発足後は学部長に就任、引き続いて総合政策研究科新設後は研究科長に就任、あと一年で任期が終わると楽しみにしておられた矢先に倒れられたのである。南山大学アジア太平洋研究センター(当初はアジア研究セン

故田中恭子先生を偲んで（吉川洋子）

ター）の研究員でもあり、発足当初はセンター主催の研究会、シンポジウムに参加されていた。また週末に開かれる学会、研究会にはできるだけ参加されていた。

田中先生は教育に、研究に、大学行政にがんばる強い決断力と強い意思の持ち主であった。その一方でグルメでもあり、多趣味でもあった。夜の8時か9時ごろ、私の研究室の電話が鳴ると、たいていは田中先生であった。あのなつかしい「吉川さん！」という声が今も耳に残っている。ひょっとすれば、天国から叱咤激励の電話がかかってくるかも知れない。田中先生、どうか安らかに故郷の地にお眠りください。